

第43図 百舌鳥耳原南陵飛地に号 採集品実測図 (1) 須恵器・瓦 (1/4)

## 付編

### 履中天皇 百舌鳥耳原南陵における過去の出土遺物について

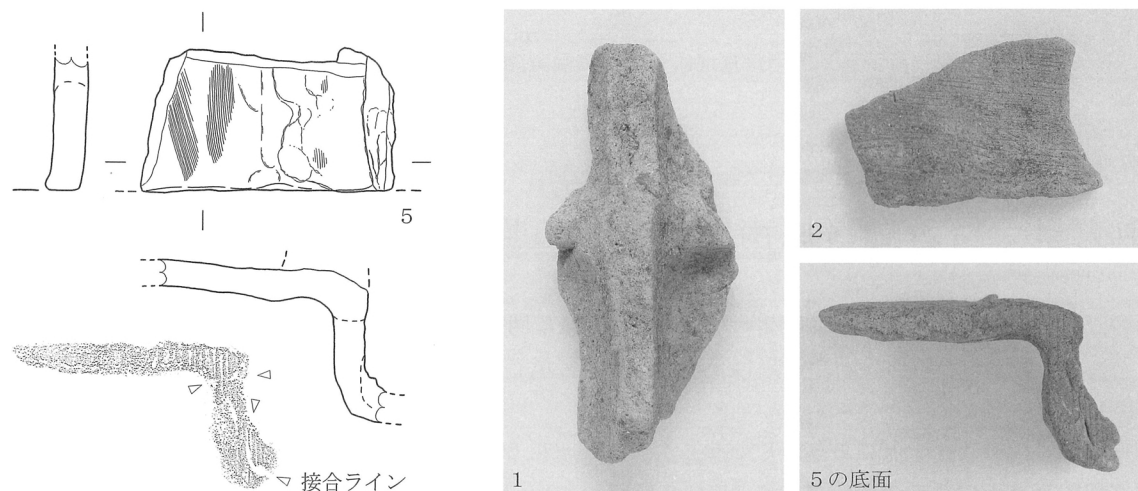
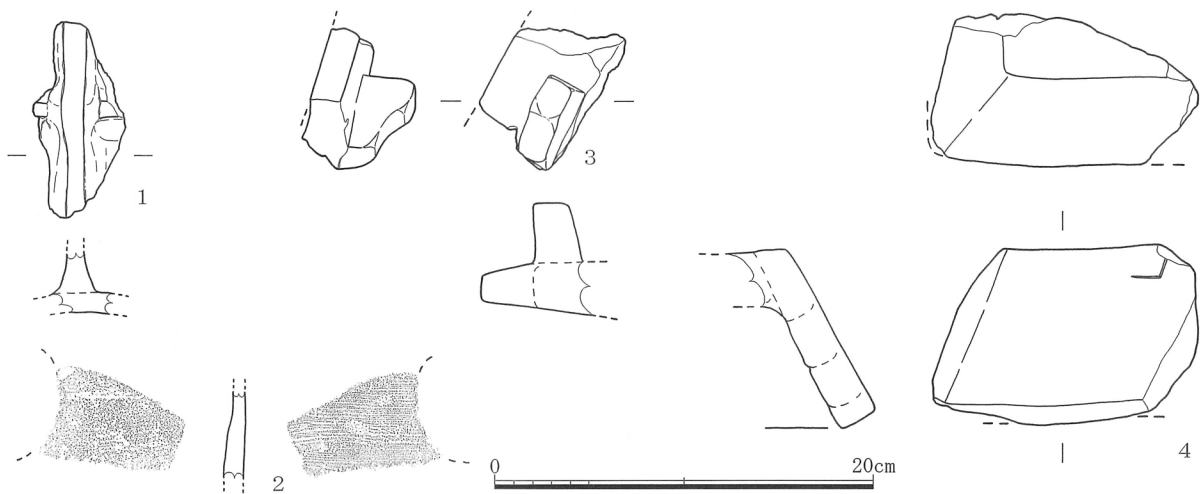
今回の立会調査における出土品ではないが、当陵出土品に関する閲覧があった際に所蔵品の現況確認をおこなったところ、未報告資料や新たに接合を確認した資料がでてきたことから、この機会に報告しておきたい(第44～46図)。

今回報告する資料は計7点であり、そのうち1～6が昭和61年に当陵が盗掘された際に回収された資料で、前方部墳頂のA坑からの出土品である<sup>(2)</sup>。7は昭和40年に西側造出の水際において採集されたものである。

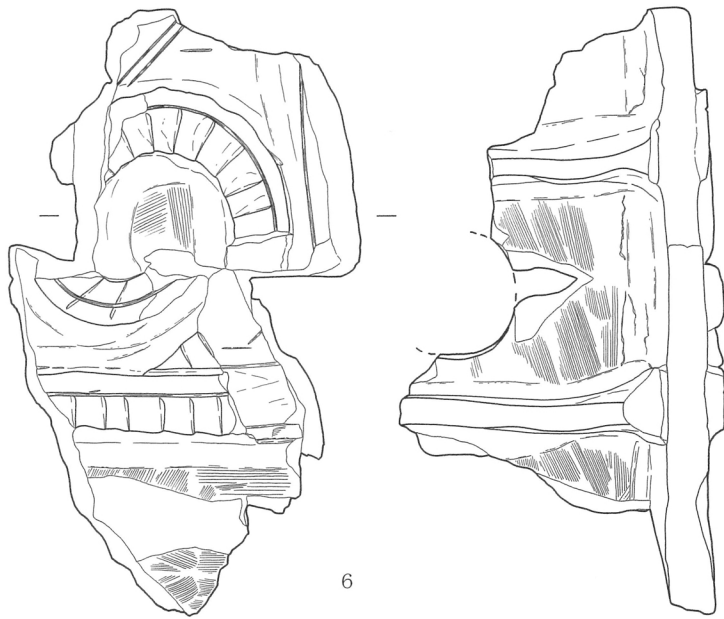
1は鱗付円筒埴輪の破片である。回収時の整理段階においてすでに鱗付円筒埴輪であることを認識していたことが同梱されていたラベルからうかがえるが、なぜか報告されることがなかったものである。鱗の接合に際して突帯が切り取られているようにもみえるが、詳細は不明である。2は円筒埴輪の胴部片である。円形の透孔が穿たれており、外面調整にはヨコハケがほどこされている。

3は切妻造もしくは入母屋造の家形埴輪の破風板の破片である。破風板は屋根の縁辺に粘土紐を積み上げることで成形されているようである。4と共に大型の家形埴輪が存在していたことがうかがえる。4は家形埴輪の裾廻り突帯の破片であるが、極めて大型であることがわかる。この裾廻り突帯についても粘土紐を接合していくことで成形されていたようである。なお、本資料には線刻がほどこされていたようである。

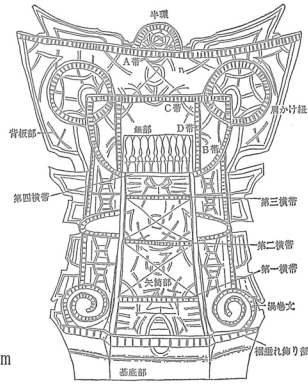
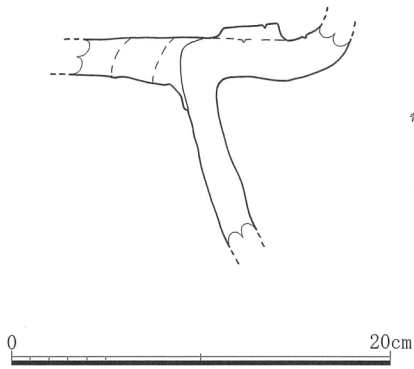
5は鞍形埴輪の矢筒部分における基底部片である。その断面形状から矢筒部と半円筒部の幅は等しくなく、半円筒部のほうが幅広に作られていることがわかる。6は鞍形埴輪の渦巻文周辺の破片で、『書陵部紀要』第46号で報告された第12図48、49ならびに未図化であった破片の計3片が接合したものである。渦巻文や横方向の区画文には有段突帯がもちいられている。この有段突帯は、断面が長方形の薄い粘土帯を本体に貼付した後にハケ工具などの板状工具で強弱をつけながら押しつけることで成形されているようである。その進行方向は渦巻文では中心に向かう方向で、横方向の区画文では向かって左方向である。横方向の有段突帯が剥離している箇所では同一方向の線刻が数本観察できることから、有段突帯の貼付前には下書きのようなものがなされていたことがわかる。また、半円筒部の突帯は背板部にまでのびており、補強粘土帯とし



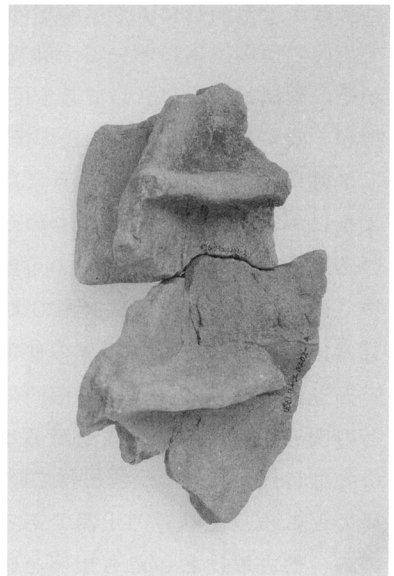
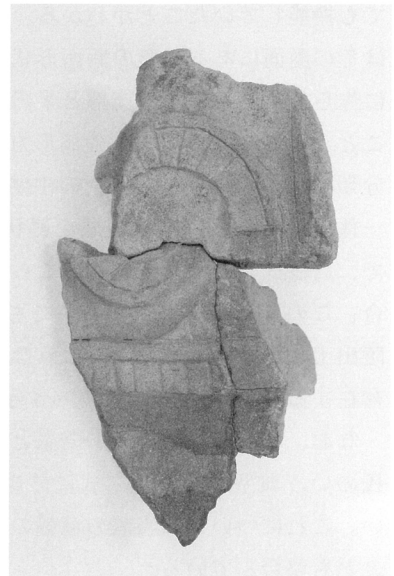
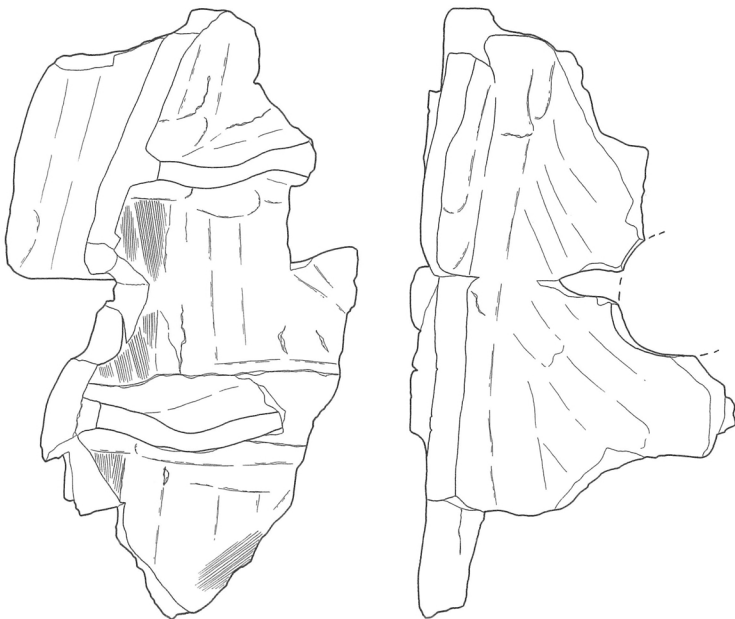
第44図 百舌鳥耳原南陵 出土品実測図 (1) 昭和61年出土 円筒埴輪・家形埴輪・鞍形埴輪 (1/4)



6



鞍形埴輪の各部名称



鞍形埴輪の基底部断面形状模式図

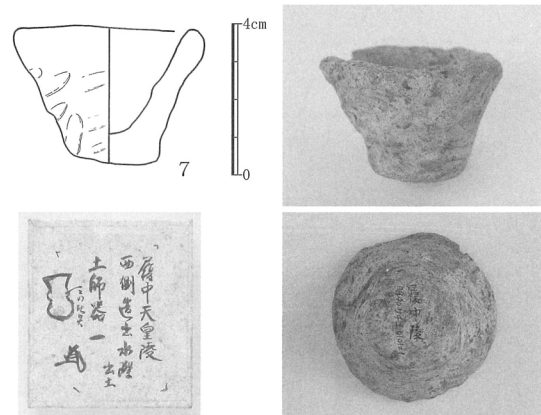
第45図 百舌鳥耳原南陵 出土品実測図(2) 昭和61年出土 鞍形埴輪(1/4)

でも機能していたことがわかる。なお、半円筒部には円形の透孔が穿たれている。この破片で注目される点はその断面にある。その断面形状は5と同様に矢筒部と半円筒部の幅が等しくなく、半円筒部のほうが幅広に作られているが、矢筒部と半円筒部を一体で成形した後に背板部を鱗状に接合することで成形されていることがわかる。鞍形埴輪の成形方法については高橋克壽氏が分類案を示しているが<sup>(3)</sup>、この資料は高橋氏の分類の一類一式と一類二式の間的なものといえる<sup>(4)</sup>。あえていえば、この成形方法は矢筒部と半円筒部を一体で成形した後に背板部を鱗状に接合する一類二式の方法で一類一式の形状を表現したものといえるので、高橋氏の成果に依拠するならば一類二式が細分可能とみる方向で考えるのが妥当であろう。そうした場合、この資料は一類二式の中でも先行する型式に位置づけられる（第45図中の模式図参照）。ただし、当陵出土の鞍形埴輪にはこのような型式のものだけでなく、高橋氏のいう典型的な一類二式に該当する資料も存在する（『書陵部紀要』第46号第11図44）。

なお、鞍形埴輪は当陵の陪冢とされることも多い七観古墳でも確認されているが、七観古墳のものは高橋氏のいう典型的な一類二式に該当するもののみであり、当陵のほうが七観古墳よりも先行する可能性が高い。これについては当陵の埴輪の焼成方法が野焼きであるのに対して、七観古墳のものは窖窯焼成であることも整合している<sup>(5)</sup>。

7は上でもふれたように昭和40年に西側造出の水際において採集されたものである。末永雅雄氏がかつて当陵の西側造出において土師質の小型土器とその破片が散布していることを指摘しているが<sup>(6)</sup>、この資料がその根拠となったものである可能性がある。この資料が収められていた箱に書かれた注記については、花押が一致することから末永氏の筆によるものと判断される。

7は現状では図化したように口縁部が残存しているように見えるが、欠損したものが摩滅などで残存しているようにみえているだけの可能性もある。底面は平滑ではなく、外面にはタタキのような痕跡がみられる。見方によってはV様式の甕の底部片とみることも可能であり、そうなると当陵の南西に位置する霞ヶ丘遺跡との関連も考えられ、築造時あるいは浚渫時の盛土内に弥生時代の包含層が含まれていた可能性もある<sup>(7)</sup>。結局のところ、土師質の土器であることは確実であるものの、他古墳においても類例を確認できないので当陵の築造時にともなう遺物であるのかどうかについては不明としかいいようがない。（加藤一郎）



第46図 百舌鳥耳原南陵 出土品実測図(3)  
昭和40年採集 土器(1/2)

#### 註

- (1) 加藤一郎「履中天皇百舌鳥耳原南陵外構柵改修工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第61号、宮内庁書陵部、2010年。
- (2) 詳細は以下の文献で報告されている。  
笠野 毅・福尾正彦「履中天皇百舌鳥耳原南陵の墳丘外形及び出土品」『書陵部紀要』第46号、宮内庁書陵部、1995年。
- (3) 高橋克壽「器埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号、史学研究会、1988年。
- (4) 和田一之輔氏よりご教示いただいた。
- (5) 七観古墳出土資料の閲覧にあたっては、阪口英毅氏ならびに京都大学総合博物館よりご高配賜った。
- (6) 末永雅雄『日本の古墳』朝日新聞社、1961年。
- (7) 土井和幸氏よりご教示いただいた。